

近現代における瀬戸内海の風景論7選

奈良県立大学 名誉教授
西田 正憲

1. はじめに

風景は文学、美術、映像など多様な文化にとりあげられる。文化が風景を発見し描出するとともに、一方で、風景が重要な契機となって文化を創りだす。風景を捉える文化、風景が素材となる文化を風景文化と呼ぶならば、瀬戸内海は多彩な風景文化を生みだしてきたといえる。本シリーズは瀬戸内海を称えた風景論、紀行文、旅行記挿図、文学等の風景文化を広くとりあげ、人々が賞賛してきた瀬戸内海の風景を紹介したい。今回は第1回として瀬戸内海の風景論7選をとりあげたい。明治時代の風景論については、既に多く論じられているので、簡単に紹介したい。中には地誌、地域論と呼ぶべきものもあるが、風景について論じている部分がみられるのでとりあげることとした。

2. 志賀重昂『日本風景論』1894 伊藤銀月『日本風景新論』1910

1894(明治27)年の志賀重昂の著書『日本風景論』は、科学的に風景を論じ、歌枕名所的な伝統的風景の秩序体系を変革した点において、わが国の近代的風景論の嚆矢とされているが、瀬戸内海の風景に関しても特筆すべき文献である。「瀬戸内の花崗岩」なる章で瀬戸内海は多島海だと次のようにする。

瀬戸内海、馬関より淡路島に到る、瑠璃一碧、大小の島嶼星羅点接す。けだし今の中国、四国たる、太古相連絡したるも、海水の侵食、地下の変遷に因り、分離して此所に「瀬戸内」なる多島海を化成せしもの、而して這般の島嶼たる、淡路島の北半全部を始め、十中の八九は花崗岩より構造せらる。
(『日本風景論』岩波文庫 1995)

「瑠璃一碧、大小の島嶼星羅点接す」は漢文の常套的表現を用いているのであろう。「星羅」は星のように点在しているという意味であるが、現代文学においても瀬戸内海が多島海の風景を夜空の星にたとえる表現が宮本輝『星宿海への道』(2003 幻冬舎)に見られる。

『日本風景論』を批判して生まれたのが、伊藤銀月の著書『日本風景新論』であった。『日本風景新論』の新論とは『日本風景論』における地形地質重視や山岳重視の論を批判した新しい論であるはずだったが、伝統的美意識重視や海洋重視に先祖返りしただけだった。『日本風景論』の斬新で説得力のある論理に比べると全体に古臭くて陳腐な論理が目につく。しかし、あるいは、それゆえというべきか、瀬戸内海は多くの紙幅を割いて絶賛した。彼は霞、靄、朧がかかる湖沼の風景を高く評価し、瀬戸内海を湖沼的風景の極致だとみる。そして、富士山と瀬戸内海を「日本の双美」と述べたうえで、日本の最上の風景は瀬戸内海の多島海であるというが、それは水蒸気を含む紫色の空気がたちこめるからすばらしいのだ。次のようにする。

此に於て、実際日本にての最上の風景と認むべき地は何れなるか、(中略)ここに至れば議論は明白也、所謂日本三景にもあらねば、日光にもあらず、箱根にもあらず、京都にもあらず、奈良にもあらずして日本に於ける最上の風景は、かの紫籠むる瀬戸内の多島海を推すべきこと、独り日本の人の公評なるのみならず、亦世界の人の公評なりとす。
(『日本風景新論』前川文栄閣 1910)

3. 塚越芳太郎『瀬戸内海』1906 小西和『瀬戸内海論』1911

1906(明治 39)年の塚越芳太郎の著書『瀬戸内海』は、瀬戸内海の特徴を「好良なる姿勢」「和適なる気象」「豊饒なる沿岸」「好風景の海」と分析し、「好風景」について次のとおり説明している。志賀の論を一步進め、「人工の美と歴史の痕跡」を指摘する。

瀬戸内海の風景は、世界の好風景也。山海の美鍾められて東西二百四十海里の間に在り。而して其好風景をなす所以は、曰く平和なる海面、曰く花崗岩より成る多島嶼、曰く中国四国の南北両山鏈に由りて水蒸気の遮断せらるるが為めの大気の清朗、此等の相調和したる結果に基き、加ふるに若干の例外ありて其景致を複雑にし、又人工の美と歴史の痕跡とありて、之が趣味を添ふ。

(『瀬戸内海』有楽社 1906)

塚越は瀬戸内海を日本の地中海だと見立てる。地中海沿岸が西欧文明発祥の地になったように、日本の発展に貢献すべき場所だと論じる。世界に誇る瀬戸内海は、日本の中心であり、「太平洋の中央市場」となり「世界の中央公園」とならなければならないと説く。時代は、日本が清国とロシアに戦勝し、帝国主義の西欧列強に伍して発展しようとしていた時であった。志賀重昂と同様、風景がナショナリズムへとつながる。

1911(明治 44)年の小西 和の著書『瀬戸内海論』は多島海について「島嶼が、或は大、或は小、或は離、或は合と云う有様であるに至っては、実に造化の妙技に対して、深く感賞の念を捧ぐるの外ないのである」と絶賛する。『瀬戸内海論』は自然景を科学的に説明するとともに、人文景も総合的に捉えるという点で瀬戸内海の風景論の一つの到達点と位置づけることができる。小西は次のとおり欧米人の評価から瀬戸内海を「世界の公園」だと認識していた。これはやがて彼の瀬戸内海国立公園創設論に繋がっていく。

無比の風光を描出して、西洋人から世界の公園、現世の極楽と云う、賛美的呼称を得て居る

(『瀬戸内海論』文会堂書店 1911)

4. 脇水鉄五郎『日本風景誌』1939

脇水鉄五郎は東京帝国大学教授として、また退官後は名誉教授として、戦前の名勝、天然記念物、国立公園の指定に深く関わった人物である。地質学・土壌学の理学博士であり、自然科学の視点から風景について論じ、『日本風景誌』(1939)、『日本風景の研究—名勝の自然科学的考察』(1943)、『車窓から見た自然界 山陽編』(1944)など、戦時下に多くの著書を出版し、瀬戸内海にも言及している。ヨーロッパとアメリカへの留学経験が豊富で、世界の風景と比較して、わが国の風景の特質を論じることができた。

脇水はわが国の変化に富む海岸風景こそ世界に誇るべきものと考えていた。太平洋式、日本海式、瀬戸内海式の三様式の海岸美があると自然科学の言葉で説明する。彼は海岸風景を重視したように、瀬戸内海についても高く評価して、その成り立ちを自然科学で論じる。現在では、灘の広い海面(沈降域)と島嶼の密集する海面(隆起域)の成因について、プレートテクトニクス理論でプレート運動によってできる皺のようなものと説明されるが、脇水は次のようにする。

瀬戸内海式風景も実はこの不連続性地塊陥没の賜であるといえる。瀬戸内海は紅海やカリフォルニア湾のような無趣味殺風景な内海でなく、一方に大阪湾・播磨灘・備後灘(燧灘)・伊予灘等の部分海面あれば、他方に淡路島を始め備讃海峡部芸予海峡部等に於ける島嶼群あり、沿岸また出入屈曲に富んで長汀曲浦の連続となり、その地形の複雑なる、その景趣の多種多様な殆ど他の追従を許さないのは、不連続性地塊陥没がその主因をなしているのである。(『日本風景誌』河出書房 1939)

脇水は海面が狭くて波の静かなことと小さい島が密集して多島海をなしていることが瀬戸内海の風景の二大特色と考えていたが、この多島海を堪能するには、小島が不規則に疎らに散在していること、これを展望する展望台が適当の位置と高さにあることが必要であると視点と視対象の関係をしきりに論じていた。彼の賞賛する風景はどこか箱庭的であった。

脇水の海岸風景の評価の根幹には海岸風景を好む風景観があったといえよう。アルプスのような壮大な山岳風景の賛美は若い人の西洋かぶれだと批判している。山岳風景は日本趣味に合わないというが、彼の趣味に合わないのである。脇水はわが国の山岳風景の真髄は溪谷美にあるともいうが、溪谷もまた山水愛好の趣味として愛でられた伝統的風景であった。自然科学者の脇水も風景観は古い時代に支配されていた。脇水はまた、世界の風景国日本は神国であり、神は理想の美しい国土を造られたのであり、東亜の盟主として皇国日本の国土美を正しく認識しなければならない、と風景研究を皇国史観と関連付けている。それは単に戦時下という時代に合わせたのではなく、彼の信念であったように読みとれる。

5. 田村剛『国立公園講話』1948

田村 剛^{つよし}は国立公園制度の創設と戦前の 12 カ所の国立公園の指定に貢献し、のちに「国立公園の父」と呼ばれた人物である。岡山県倉敷の出身で、旧制岡山中学校(現朝日高等学校)、第六高等学校(現岡山大学)を経て、東京帝国大学農科大学林学科卒業、大学院へ進む。1920(大正 9)年、内務省が国立公園創設のため、29 歳の田村を嘱託として採用する。内務省は田村を中心に、国立公園候補地を決めて、1921(大正 10)年から候補地の調査を進める。1923(大正 12)年、田村は米欧 14 カ国の視察に出向く。約 1 年半後に帰国すると、外遊中の関東大震災によって内務省は国立公園創設どころではなく、嘱託のポストもなくなる。1927(昭和 2)年、国立公園創設の機運が再燃し、36 歳の田村は嘱託に復職する。1928(昭和 3)年、日本の統治下にあった台湾の調査に出向いた帰路に、下関で船舶事故に遭遇し、片脚を切断する。37 歳だった。しかし、国立公園創設にかける情熱は揺らぐことがなかった。

国立公園候補地調査も終了し、1931(昭和 6)年、内務省は国立公園法を制定し、すぐさま法に基づく国立公園委員会を開催し、国立公園の選定と区域決定の審議を進める。この第1回の国立公園委員会で、田村は瀬戸内海の区域について東は小豆島、西は鞆の浦の備讃瀬戸案を提示して、次のとおり説明する。

多島海岸トシテ本邦ニ於テ傑出セルノミデナク、夙ニ世界ノ公園トシテ賞賛セラレテ居リマス。其ノ海岸ニ生育スル黒松及ビ常緑潤葉樹ノ成セル森林ハ本邦特有ノ植物景觀ヲ呈シテ居リマス。要スルニ瀬戸内海ニハ海岸風景トシテ威圧的ナ豪壮ナル景觀ハナイガ、変化ニ富ミ平和ニシテ優美ナル点ニ於テハ世界的ニ推奨セラルベキモノガアリマス。 (『国立公園委員会議事録』内務省 1931.11.24)

多島海として傑出し、「世界の公園」として賞賛されているという。こうして内務省原案どおり、1934(昭和 9)年3月 16 日、瀬戸内海国立公園が誕生する。田村は 43 歳となり、調査開始から 14 年が過ぎていた。

田村はのちに著書『国立公園講話』(1948)で瀬戸内海の特質を次のとおり分析的にまとめている。

由来、瀬戸内海の性格は、第一に内海であるといふこと、第二に多島海であること、第三は湖水のやうに静かな海面であるに係はず、一つの幅の広い河川のやうに、海流と潮流との流れがあつて、灘があると同時に急流となる瀬戸の地形をもつてゐること、第四にその地質が、花崗岩を基調とすると共に、火山岩が介在して、勝れた景觀を造つてゐること、第五にその植生が黒松を基調とする暖帯林であること、第六に気候温暖で雨が少いこと、第七には、上代より日本文化の発祥地であり培養地であつて、史蹟、社寺、名勝等に富むこと等で説明せられる。 (『国立公園講話』明治書院 1948)

田村は備讃瀬戸の多島海を絶賛したが、同じ多島海でも芸予諸島は島が大きすぎ、松島や志摩の英虞湾、朝鮮の鎮海湾などは規模が小さすぎるとみなしていた。エーゲ海の多島海については植物が生育しておらず、広すぎてまとまりがなく、スウェーデンとフィンランドの間の多島海については裸島など荒涼としていると述べている。田村にとって瀬戸内海こそ世界的に最も美しいのであった。

7. 大井道夫「褻の風景」1994

大井道夫は1948(昭和23)年厚生省に入省し、戦後の国立公園行政に従事した技官である。一世代上の田村剛とは親密な関係にあり、大井は田村を恩師と呼び、田村も著書『国立公園講話』(1948)において装丁を煩わせたと厚生省国立公園部の大井に謝意を表している。1971(昭和46)年環境庁発足に伴い厚生省国立公園部が環境庁自然保護局に改組されたとき、技官のトップを務めていた。退官後も国立公園行政に関わり、最後は財団法人国立公園協会の会長となる。55歳で学位論文「わが国における自然公園と自然保護思想の研究」(東京大学1978)で農学博士号を取得する。碩学で筆が立ち、味わい深い著作を数多く残し、著書『風景への挽歌—私の自然保護論』(1978)に結実している。没後には『大井道夫著作集』(2007)も刊行された。筆力のみならず講演の話術も聴衆を魅了してやまなかった。

大井は瀬戸内海国立公園には戦後の区域拡張に携わり、現地調査を重ねたことから思い入れが深いという。ときには国立公園の中で瀬戸内海が一番好きだといいきる。彼が生きた20世紀後半は自然破壊の時代であり、彼の最大の問題意識は、日本人はなぜ自然を破壊するのか、どうしたら自然を保護できるのかにあった。日本の「中庭」ともいえる瀬戸内海について、高度経済成長期の破壊を嘆きながらも、それでも瀬戸内海は唯一無二の好風景を有していると語りつづけていた。全国の国立公園を見渡して論じた連載「70歳の風景論」(『国立公園』520～531、1994～95)においても、瀬戸内海を最高に評価していた。

1989(平成2)年、大井は岡山県が設置した瀬戸内海景観研究会で会長として、瀬戸内海景観形成指針(ガイドライン)をとりまとめ、関係府県・市町村等の景観担当者を集めた講演会に臨んだ。1987(昭和62)年に通称リゾート法と呼ぶ総合保養地域整備法が制定され、リゾート構想が吹き荒れた時代だった。この講演録が小冊子『瀬戸内海の優れた景観を国民的財産として守り、育て、将来に伝えていくために』(岡山県、1990)として残っている。彼は講演で瀬戸内海の風景の優れた点を分析してみせる。

風景の優れた点として、文化の香りがすること、日本風景の真髄を示すこと、日本人の心のふるさとであることの3点をあげる。第1の文化の香りについては、古い港を典型として、瀬戸内海の風景には文化の香りがするという。第2の日本風景の真髄については、日本風景の特徴は細密性、生物性、四季性、人文性の4点にあるが、瀬戸内海の風景はその特徴をことごとく有しているという。第3の日本人の心のふるさとについては、瀬戸内海は人々がほっとする国民的原風景であり、どこに行っても波静かな松林のある平和な風景を見せ、安らぎをもたらす、魂を惹きつける心のふるさとだという。

1994(平成6)年、大井は『瀬戸内海国立公園の誕生—瀬戸内海国立公園指定60周年記念冊子—』に「褻の風景」と題する小文を寄稿している。大井にとって、瀬戸内海は非日常的な探勝的風景である「晴の風景」ではなく、日常的な生活的風景である「褻の風景」であり、それが瀬戸内海の真髄であった。彼はシーボルトとコトーの旅行記の瀬戸内海賞賛を引用したあとで、次のようにしている。

この両者の賞賛は気取りのないありのままの風景、いわば普段着の瀬戸内海と接して生まれたものである。「褻の風景」、これこそ瀬戸内海の魅力の根源といってよい。(中略)島々と海、光と影、かき筏と干潟、古い港町、雁木、船また船、魚の干もの、神社の梅の木、五百羅漢、段々畑の麦と花々、いずれも肩肘はらない褻の風景である。(「褻の風景」『瀬戸内海国立公園の誕生』瀬戸内海研究会1994)